

社会的現実の情報化＝仮想現実化¹⁾

—— 後期ボードリヤールとヴィリリオ

水 原 俊 博

1 はじめに

1.1 問題の所在

社会的現実とは、政治、経済、社会、文化などの社会的領野からなり、人々は、日常／非日常、私的／公的な社会生活を送っている。現代社会では、科学技術の発展により、社会的領野、社会的生活に「情報化（computerization）」を中心とするハイテク化がひろく、深く浸透し続けている。それにより、社会的現実とは物理的に構成された実空間（直接的な身体的次元）から、ハイテクによって媒介された電算処理可能な情報によって構成された人工的な仮想現実に移行しているかのようだ。たしかに「食事をとり、体を洗い、衣服を着、トイレに行くといった」²⁾ (Virilio 1990=2003: 169)（なかば）生理的行動は、現状では完全に仮想現実化しているとは考えにくいものの、仮想現実的な側面（ハイテク化の浸透）を挙げることは今後の可能性まで含めるとかなり容易である。とはいえ、社会的現実とはどれほど仮想現実化しているのか。それは今後どこまで進むのか。また、それにより、社会的現実とはどのような影響を被るのか。

こうした問いについて、社会理論的な研究が展開されてきたが、1990年代以降のボードリヤールの著作（後期ボードリヤール）はそのうちのひとつとして捉えることができる。とはいえ、後期ボードリヤールの社会理論は、前期、中期のボードリヤールの社会理論に比べて、理論的戦略があるとはいえ、奔放で統合を欠き、理解に苦しむことが多い。それでも、その叙述には知的刺激や

社会理論的な気づきをもたらすこともまた多い。こうしたことから、これまで拙稿（水原 2014, 2015）では、後期ボードリヤールの社会理論（ポストモダン情報社会論）を再構成し、後期ボードリヤールと同時期に情報社会を別視点で検討したボルツのメディア理論を検討した。本稿では、同様の目的で、後期ボードリヤールの社会理論にそって、ヴィリリオの社会理論（速度学的情報社会論）を検討する。なお、本稿では、1970年代から多作の著作によって展開されてきたヴィリリオの社会理論の全体を扱うことはせず、90年代以降の情報社会を直接検討する著作を中心に扱う。また、後期ボードリヤール、ヴィリリオの社会理論について、詳細な比較検討はおこなわない³⁾。

1.2 本稿の構成

以下では、まず、ボードリヤールの理論的軌跡、後期に展開したポストモダン情報社会論の概略を示す（2.1, 2.2）。次に、ヴィリリオによる速度学的情報社会論を紹介する（3.1, 3.2）。その上で、後期ボードリヤールのポストモダン情報社会論における情報化とその社会的影響に関する3段階論にそって、ヴィリリオの速度学的情報社会論を検討する（3.3）。

2 後期ボードリヤールによるポストモダン情報社会論

2.1 ボードリヤールの理論的軌跡

ボードリヤールの理論的軌跡は、前半の記号論

的消費社会論、後半のポストモダン論に取り組んだ時期に、大まかに分けることができ、さらに、ポストモダン論は、前半のおもに記号論に依拠して文化批評を中心に展開した時期、後半の情報社会論を展開した時期に分けることができる（水原 2014, 2015）。こうした理論的な軌跡に、前期、中期、後期という区分を適用し、年代を対応させてみると、以下のようにまとめることができよう。

- ・前期 70年代……記号論的消費社会論（『消費社会の神話と構造』など）
- ・中期 80年代……記号論的ポストモダン文化批評（『シミュラクルとシミュレーション』など）
- ・後期 90年代以降……ポストモダン情報社会論（『完全犯罪』など）

本稿では1990年代以降に展開されたポストモダン情報社会論を扱う⁴⁾。

2.2 ポストモダン情報社会論の3段階⁵⁾

ここでは、後期ボードリヤールのポストモダン情報社会論を簡単に紹介する。水原（2015）で検討したように、ポストモダン情報社会論では、情報化とその社会的影響は、以下のとおり3段階論として捉えることができる。

- (1) 社会的領野の仮想現実化
- (2) 社会的領野の現実からの乖離と相互浸透
- (3) 悪による情報システムの攪乱

(1) 社会的領野の仮想現実化は、情報化によって、社会的領野、すなわち、社会、経済、政治、文化が仮想現実に変換（仮想現実化）され、情報システム化している（あるいはその途上にある）ことを示している。後期ボードリヤールはこれを「完全犯罪」（Baudrillard 1995=1998）と呼ぶ。

(2) 社会的領野の現実からの乖離と相互浸透は、

仮想現実化したことで、社会的領野が現実の目的、起源、準拠枠（構造）を離れ、内破し、言い換えると、社会的領野の諸要素が、分野を横断して置換えられ、混同され、拡散し、相互転移することを指し、その動向は偶然的で不確実であるという。

(3) 悪による情報システムの攪乱についてだが、情報化による社会的領野の情報システム化には、善（肯定性、good）のみを追求し、悪（evil）、すなわち、否定性、特殊性（他者性）、病理などを排除する傾向が認められるものの、悪は情報システムにおいて透明化し、偶然的かつ不確実に発生し、ウィルス的に拡散して、情報システムを不安定化させる一方、情報システムの暴走を抑止し、更新を促すという。

以上のように要約される後期ボードリヤールのポストモダン情報社会論は、現代の情報社会を理解するのに示唆的ではあるが、(3) 悪による情報システムの攪乱については内容がはっきりせず、疑問を感じることが少なくない。ともあれ、次節では、以上のように情報化とその社会的影響に関して、3段階論をとる後期ボードリヤールのポストモダン情報社会論にそって、ヴィリリオの速度学的情報社会論を検討していく。

3 ヴィリリオの社会理論

3.1 速度と社会

ヴィリリオの社会理論は、『速度と政治』（Virilio 1977=2001）など1970年代から多くの著作をとおして展開され、そこでは社会の様態、変動が、おもに「速度（vitesse, speed, 速さ）」の視点から検討される。速度とは一般的には「単位時間あたりの移動距離（変化量）」を意味し、任意の移動距離に費やされる時間が短いと「高速」「速い」と形容される。また、移動距離だけでなく、任意の行動や作業、処理が短時間で遂行される場合も「速い」と表現される。こうしたことから、ヴィリリオにとって、「速度とは語のもっとも完全な意味で稼いだ時間」（Virilio 1977

=2001: 34) として捉えられる。

ヴィリリオによれば、人、モノなどの物理的な輸送、情報の移送 (transfert, 伝達、送受信) の速度は、政治的統治の地理的拡大、戦争の勝利、経済的富の創出に影響をあたえ、政治、戦争、経済の様態を変動させる (Virilio 1996 = 1998: 6-10)。したがって、輸送／移送手段をマクルーハンのメディアとして広義に捉え、メディア論的にはヴィリリオにとって、メディアを介した「メッセージの〔輸送／移送——引用者挿入〕速度自体がメッセージ」(Virilio 1998 = 1999: 184) となる。これは、ある種のメディア決定論をヴィリリオがとっていることを示唆し、実際、そのように解釈できる叙述も散見される (Virilio 1993 = 2002: 61, 1996 = 1998: 11)。とはいえ、ヴィリリオが詳細に事例考察をするメディア史が示すとおり (e.g. Virilio 1996 = 1998: 6, 34-6)、輸送／移送手段の革新は、政府、軍、産業（多くはこれらの複合体）によってもっぱら取り組まれてきたことから、ヴィリリオの立場をメディア決定論だと単純にみなすことはできない。

3.2 速度学的情報社会論——社会的現実の情報化＝仮想現実化

ヴィリリオは蒸気機関、内燃機関の開発、普及を「輸送革命」とし、近年の情報通信革命を「移送革命」として捉える⁶⁾ (Virilio 1993 = 2002: 211, 1998 = 1999: 165)。そして、これらの革新は、政治経済に大きな影響をあたえてきたが、それだけでなく、社会意識、社会的行為、社会関係などにも多大な影響をあたえてきたとしている。本項では、情報通信革命の広範な社会的影響に関するヴィリリオによる速度的視点からの検討、すなわち、「速度学的情報社会論 (dromological theory of information society)」⁷⁾ についてみていく。

産業革命以降の活発な技術革新によって、輸送／移送の速度は高度化（加速）してきた。ヴィリリオによれば、近年の情報通信革命は限界的な加速によって移送の「絶対速度」を実現したとい

う。他方、輸送の加速も無視できないものではあるが、輸送はあくまで「相対速度」にとどまる (Virilio 1995b: 220, 1998 = 1999: 153-7)。そして、情報通信革命による移送の絶対速度のもとで、グローバルな（地球規模の）「同時性 (real time, リアルタイム)」⁸⁾ が実現したという (Virilio 1990 = 2003: 22-3, 196, 1998 = 1999: 17-8)。これにより、ネットワーク化された個人、団体、組織はグローバルかつリアルタイムでのコミュニケーションをおこなっている。こうした事態に関するヴィリリオの見解を、以下、相互に関連する3点から、独特な用語についても説明しつつ要約的に示す。

第一に、絶対速度により移送のリアルタイムを実現した情報ネットワークは、コミュニケーションはもちろん、労働、消費、観光といった多様な社会的行為が展開される環境、すなわち、「速度環境 (dromosphere, 速度圏域)」(Virilio 1990 = 2003: 124) をつくりだす。そして、そこは即時的な「双方向活動性 (interactivity, 双方向性)」⁹⁾ (Virilio 1998 = 1999: 13, 1990 = 2003: 154) を特徴とする。こうして、そこでの相互行為は地球規模であるため、行為の主体や対象は必然的に「遠隔現前 (téléprésence)」¹⁰⁾ し、行為は「遠隔行為 (téléaction)」、ひいては社会的現実「遠隔現実 (téléréalité)」となる (Virilio 1990 = 2003: 27-8)。そして、この遠隔現実こそが「仮想現実 (virtual reality)」ということになる（社会的現実の仮想現実化）(Virilio 1990 = 2003: 23-9, 149, 1998 = 1999: 12-3)。さらにいえば、そこでは地理的制約にとらわれないヴァーチャルな共同体といえる「メタ都市 (métacité)」が形成されるという (Virilio 1998 = 1999: 15, 152)。

第二に、社会的現実の情報化＝仮想現実化は、物理的な社会的現実を駆逐、圧倒するほどの展開をみせる。引用で示すと、「移動時間ゼロのリアルタイムで稼働する送受信機が、領土という現実空間で高速移動していた高出力エンジンを、次々に駆逐していく」(Virilio 1993 = 2002: 146)。つまり、情報移送の加速は物理的な輸送を衰退さ

せ、そのため、「実際の現前には価値がなくなり、物質的立体感が無意味となり、映像的立体感のみが重視されるようになる」(Virilio 1998=1999: 154)。だが、カメラなどの機器や(携帯)端末機器がグローバルに連結して絶対速度で移送するのは視覚、聴覚情報だけではない。「デジタル化された化学的センサーによって嗅覚情報も電子化」(Virilio 1998=1999: 155)しうるため、「視覚、聴覚、触覚、嗅覚情報の《デジタル化》が進行するにつれ、直接的感覚は衰退する」(1996=1998: 148)。こうしたことから、社会的現実の情報化=仮想現実化は徹底したものになるといえよう。ヴィリリオは以下のようにいう。

同時性技術によって、現実存在そのものが終わりを告げた (Virilio 1993=2002: 86)。

以上の結果、社会的現実の情報化=仮想現実化によって、実空間(物理的な地理的空間)はその社会的意義を喪失する。そのため、たとえば、政治的には地政学(geopolitique)ではなく、「時政学(chronopolitique)」(Virilio 1996=1998: 11)が重要になり、社会生活は「脱ローカル化(délocalisation)」する¹¹⁾(Virilio 1998=1999: 14)。結局のところ、現代人は「いま、ここ(hic et nunc)」に在りとしても、地域社会からは離脱し、仮想現実上を絶対速度で移動して遠隔遍在し¹²⁾(Virilio 1990=2003: 218)、遠隔的な社会的行為をするというわけだ。たとえば、部屋のなかで旅行をすませることも可能だろう¹³⁾(1996=1998: 51)。そして、実空間における「いま、ここ」を起点とする地理的広がり、さらには、過去、現在、未来の3つの時制からなる社会環境は解体し(Virilio 1996=1998: 47, 1990=2003: 177)、時間と空間の感覚は失われる(Virilio 1990=2003: 175)。こうして、広大無辺な情報ネットワーク、さらに、リアルタイムの「永続する現在」(Virilio 1998=1999: 162)によって構成される仮想現実のなかで、人々は生活を送ることにな

る。そこで人々が遠隔遍在する場所とは、現代の情報社会に対して悲観主義的なヴィリリオにとって「非場所(non-lieu)」(Virilio 2004=2007: 64)でしかなく¹⁴⁾、現代の情報化とは、人間を万物の尺度とした距離の生態系、つまり、「灰色のエコロジー(écologie grise, 感覚世界のエコロジー)」の決定的な汚染でしかない(Virilio 1995a=2001, 1996=1998: 148, 1998=1999: 136)。

第三に、絶対速度での情報移送がなされる社会的現実=仮想現実は、決して解放的(自由)なものではなく、徹底的に管理される。そこは、ヴィリリオによれば、「フーコーによって告発された監禁社会についてドゥルーズが予告した管理社会」(1996=1998: 88)だという。というのも、「移動速度が上がれば上がるほど、移動の管理は絶対的になり、至るところに管理が存在する」(Virilio 1990=2003: 196)からだという¹⁵⁾。

3.3 ポストモダン情報社会論と速度学的情報社会論

前項では、ヴィリリオの速度学的情報社会論を要約的に示したが、これを踏まえて、本項では、後期ボードリヤールのポストモダン情報社会論における情報化とその社会的影響に関する3段階論にそって、ヴィリリオの速度学的情報社会論を検討する。

第1段階の「社会的領野の仮想現実化」についてであるが、後期ボードリヤールとヴィリリオはともに、社会的領野が徹底して仮想現実化しているとの見解をとっている¹⁶⁾。また、情報通信技術の革新の影響を重視している点でも両者は同様であり、さらに、両者とも、単純なメディア決定論、技術決定論をとっていない。しかしながら、情報通信技術など革新の多くが軍事技術の開発と密接に関連してきたこと、さらに、情報通信技術の革新による移送の加速こそが、社会的に大きな影響をあたえるとする点で、ヴィリリオは後期ボードリヤールと異なるといえよう。

第2段階の「社会的領野の現実からの乖離と相

互浸透」については、前項での要約的な記述から、ヴィリリオと後期ボードリヤールはほぼ同様の見解をとっていると思われる。ただし、ここでも、ヴィリリオが強調するのは、情報通信技術の革新による移送の加速の影響である。たとえば、絶対速度をもつ「情報技術は（中略）現実からの排除を、私たちに向けてどんどん推し進め、旧来の社会性を解体する」（Virilio 1990=2003: 35-6）とヴィリリオはいう。そして、具体的に、情報携帯端末の利用が「私的な時間と労働時間の区別を廃れさせる」（Virilio 1998=1999: 88）ことが指摘される。他にも、情報通信技術の革新による移送の加速は、リアルタイムで瞬時に（ライブで）視覚、聴覚情報を移送するため、たとえば、政治が娯楽的なショーとなり（劇場型政治）、選挙のために政治家が自分だけでなく、家族（e.g. クリントン家）の容姿を見栄えがするように変えること（Virilio 1998=1999: 96-100）、さらに、関連するが、テレビの報道番組と娯楽番組が混淆することが指摘される（Virilio 1993=2002: 30）。

第3段階の「悪による情報システムの攪乱」については、ヴィリリオと後期ボードリヤールは見解を異にするように思われる。ヴィリリオは後期ボードリヤールと同様に、情報ネットワーク＝仮想現実が問題を抱え、不安定化すると、小さくない被害をもたらすと考える。ヴィリリオによれば、その要因は、情報通信技術によるグローバルな移送の絶対速度のリアルタイム（同時）性である。そして、それによって、何らかの事故は世界規模で瞬時に波及して大惨事になる恐れがあるというわけだ。これをヴィリリオは「全面的＝全域的事故（accident général）」（Virilio 1998=1999: 175）と呼ぶ。全面的＝全域的事故の前兆的な事例として、ヴィリリオは金融市場の破綻の連鎖反応を挙げ、具体的には1987年にコンピュータが引き起こした株価の大暴落（暗黒の木曜日）に言及している（Virilio 1998=1999: 167, 175）。この株価暴落については、後期ボードリヤールも取り上げている。ただし、ボードリヤールの場合、システ

ムの暴走による破局的な事態は想定していないが、ヴィリリオはそうした重大な危機を不安視している（Virilio 1996=1998: 108）。

4 結論

ここまで、ヴィリリオの速度学的情報社会論を要約的に示した上で、後期ボードリヤールのポストモダン情報社会論における情報化とその社会的影響に関する3段階論にそって、ヴィリリオの速度学的情報社会論を検討してきた。それによれば、ヴィリリオと後期ボードリヤールの見解はおおむね同様だと考えられるものの、ヴィリリオが速度の視点から一貫して議論を展開し、また、情報ネットワーク＝仮想現実の暴走が破局的な事態を招く恐れがあるとする2点において、ヴィリリオは後期ボードリヤールと異なる。そして、この2点は後期ボードリヤールのポストモダン情報社会論とヴィリリオの速度学的情報社会論とを理論的に接合する場合、重要なポイントになるだろう。前者は、後期ボードリヤールにはない速度の視点を提供する点で貴重であり、後者については、情報システム＝仮想現実には固有の危機について、後期ボードリヤールとヴィリリオのいずれが妥当であるのか、事態の推移を踏まえて詳細に検討していく必要があるだろう。

さて、最後に、ヴィリリオの速度学的情報社会論について付言しておく、本稿では、後期ボードリヤールのポストモダン情報社会論との理論的接合を意図したために言及しなかったが、ヴィリリオの速度学的情報社会論は、現象学系の思想（フッサール、ハイデガー、メルロ＝ポンティ）を頻繁に参照して展開されている。したがって、速度学的情報社会論を現象学的視点から検討することも可能だといえる¹⁷⁾。たとえば、現象学的社会学では（Berger and Luckmann 1966=1977）、実空間における「いま、ここ」での生活世界にもとづく「至高の現実」である社会的現実の構成が精緻に検討される一方、速度学的情報社会論では、

情報通信技術が実現する絶対速度のリアルタイム性によって、「いま、ここ」の社会的意味の喪失が指摘される。また、現象学的社会学では、至高の現実＝社会的現実の構成において、生活世界で間主観的に共有されたローカルな「標準時間」が重要な役割を果たすと指摘される。一方、速度学的情報社会論によれば、現代のグローバルな情報社会では、ローカルな標準時間ではなく、「協定世界時（UTC）」のようなグローバルな「世界時間」の重要性が指摘される（Virilio 1996 = 1998: 63, 1998 = 1999: 11）。このように現象学的な社会理論とヴィリリオの速度学的情報社会論とを対照させて吟味することは、現代の情報社会における社会的現実の構成を検討する上で重要だといえるだろう。

【注】

- 1) 本稿はハイパーメディアリアリティ研究会（代表：成田康昭，立教大学）での研究発表を発展させたものである。本稿にまとめるにあたり、田辺龍氏（立教大学）、米倉律氏（日本大学）、成田康昭氏からは、同研究会で貴重な助言を頂いた。記して感謝申しあげる。
- 2) 本稿での引用は邦訳と一致しない場合がある。以下同様。
- 3) ヴィリリオとボードリヤールは相互に相手の社会理論についてコメントしている。また、両者の社会理論はともにフランスのポストモダン社会理論として捉えられることも多く（Ritzer 1997）、「ソーカル事件」ではともに科学用語の「乱用」で批判された。なお、ボードリヤールの社会理論研究で知られる Gane（2000）や Kellner（2000）によるヴィリリオ論がある。
- 4) 「ポストモダン社会理論」「ポストモダン」「ポストモダニティ」などの詳細は水原（2015）を参照。
- 5) 本節の叙述は水原（2015: 84）をもとに一部加筆したものである。
- 6) 輸送革命、移送革命の後には「移植革命」がずっと続くという（Virilio 1993 = 2002: 142）。移植革命とは人工臓器、クローン、ナノテクノロジーなどの応用医療での革新を指すと思われる。ヴィリリオによれば、この「第3の革命は、移植の革命である。それはバイオテクノロジーによる生体の植民地化」（Virilio 1996 = 1998: 59）だという。
- 7) 「速度学（dromologie, 速度術）」はヴィリリオの社会理論におけるキー概念のひとつである。ギリシア語の dromos は「競争路」「走ること」を意味するという（Virilio 1996 = 1998: 7）。速度学とは誤解を恐れずにいえば、速度の学／術（logic of speed）であり、それが社会の様態や変動に重大な役割を果たすというのが、ヴィリリオの独特な発想だと思われる（Armitage 2000: 6）。
- 8) ヴィリリオは、「瞬時性（live, ライブ、実況中継）」を、リアルタイムとほぼ同義の概念として用いている（1990 = 2003: 20）。したがって、瞬時性は身体レベルでの直接的な集合行動、集合的なコミュニケーション（e.g. プロスポーツやコンサートの直接的な観覧など）を意味しない。
- 9) ヴィリリオは、行動や反応の連鎖を端的に意味する「サイバネティックス」を、双方向活動性とほぼ同義に用いている（Virilio 1998 = 1999: 13）。
- 10) 情報通信技術のインターフェイスを介した外観は、物理的な地理的制約から自由な「超外観（transaparence）」となる（Virilio 1998 = 1999: 20）。
- 11) 社会的現実のグローバルな情報化＝仮想現実化による脱ローカル化の議論は、time-space distanciation, 脱埋め込み、再埋め込みといった概念からなるギデنزによるハイ・モダニティ論（Giddens 1990 = 1993）、time-space compression をキー概念とするハーベ이의ポストモダニティ論（Harvey 1990 = 1999）と深くかかわるのは指摘するまでもあるまい。
- 12) ヴィリリオは、行為体（個人や組織）が仮想現実において遍在することを「遠隔遍在（téléomniprésence）」（Virilio 1990 = 2003: 173）と呼ぶ。
- 13) 観光社会学では、仮想現実上での観光、あるいは、情報通信技術を利用した観光全般は「ポスト・ツーリズム」として捉えられる（Urry and Larsen

2011=2014)。

- 14) 仮想現実には遍在する事態について、ヴィリリオは「私が至る所にいるとすれば、いったいどこにいるのだろうか」(Virilio 1990=2003: 215)と困惑する。
- 15) なお、ヴィリリオの社会理論はドゥルーズ＝ガタリの戦争機械論に影響をあたえたことは知られているが (Deleuze et Guattari 1980=1994)、フーコーとの関連について付言すると、ヴィリリオは、「まなざしのグローバル化」(Virilio 1996=1998: 24)、「まなざしの植民地化」(Virilio 1996=1998: 100)などにみられるように、フーコーの言説分析的な意味で (Foucault 1963=1969)、「まなざし (regard, gaze)」概念を用いていると思われる (cf. Urry and Larsen 2011=2014)。
- 16) ヴィリリオは「湾岸戦争は起こった」として、ボードリヤールの湾岸戦争論を (ユーモアをまじえて?) 批判しているものの (Virilio 1996=1998: 117)、情報通信技術に媒介されたという意味において、湾岸戦争 (1990) が、誤解を恐れずにいえば、メディア戦争であったとする点で、ヴィリリオはボードリヤールと近い見解をとっているように思われる。
- 17) こうした試みとのひとつに、ハイデガーとヴィリリオとを関連させて批判的に検討した和田 (2004) がある。また、ヴィリリオを扱ってはいないが、成田 (2015) は、シュッツの現象学的社会学の視点から、現代の情報社会における社会的現実の構成を検討している。

[文献]

- Armitage, J., 2000, "Paul Virilio: an Introduction," Armitage, J. ed., 2000, *Paul Virilio: From Modernism to Hypermodernism and Beyond*, London: Sage, 1-23.
- Baudrillard, J., 1991, *La guerre n'a pas eu lieu*, Paris: Galilée. (=1991, 塚原史訳『湾岸戦争は起こらなかった』紀伊國屋書店.)
- , 1995, *Le crime parfait*, Paris: Galilée. (=1998, 塚原史訳『完全犯罪』紀伊國屋書店.)
- Berger, P. and T. Luckmann, 1966, *The Social Construction of Reality: A Treatise in the Sociology of Knowledge*, New York: Anchor Books. (=1977, 山口節郎訳『現実の社会的構成——知識社会学論考』新曜社.)
- Deleuze, G. et F. Guattari, 1980, *Mille plateaux: capitalisme et schizophrénie*, Paris: Minuit. (=1994, 宇野邦一訳『千のプラトー——資本主義と分裂症』河出書房新社.)
- Foucault, M., 1963, *Naissance de la clinique: une archéologie du regard médical*, Paris: Presses universitaires de France. (=1969, 神谷美恵子訳『臨床医学の誕生』みすず書房.)
- Gane, M., 2000, "Paul Virilio's Bunker Theorizing," Armitage, J. ed., 2000, *Paul Virilio: From Modernism to Hypermodernism and Beyond*, London: Sage, 85-102.
- Giddens, A., 1990, *The Consequences of Modernity*, Stanford: Stanford University Press. (=1993, 松尾精文・小幡正敏訳『近代とはいかなる時代か? ——モダニティの帰結』而立書房.)
- Harvey, D., 1990, *The Condition of Postmodernity*, Cambridge, Massachusetts: Blackwell. (=1999, 吉原直樹監訳『ポストモダニティの条件』青木書店.)
- Kellner, D., 2000, "Virilio, War and Technology: Some Critical Reflection," Armitage, J. ed., 2000, *Paul Virilio: from Modernism to Hypermodernism and Beyond*, London: Sage, 103-125.
- 水原俊博, 2014, 「後期ボードリヤールの社会理論の社会的検討」『信州大学人文科学論集』1: 93-103.
- , 2015, 「後期ボードリヤールのポストモダン情報社会論——N. ボルツのメディア理論との接合を目指して」『信州大学人文科学論集』2: 81-9.
- 成田康昭, 2015, 「インターネットに媒介された『現実の社会的構成』」『応用社会学研究』57: 47-67.
- Ritzer, G., 1997, *Postmodern Social Theory*, New York: McGraw-Hill.
- Urry, J. and J. Larsen, 2011, *The Tourist Gaze 3.0*, London: Sage. (=2014, 加太宏邦訳『観光のまな

ざし [増補改訂版]』法政大学出版局.)

Virilio P., 1977, *Vitesse et politique*, Paris: Gallée. (= [1988] 2001, 市田良彦訳『速度と政治』平凡社.)

———, 1990, *L'Inertie polaire*, Paris: Christian Bourgois. (= 2003, 土屋進訳『瞬間の君臨——リアルタイム世界の構造と人間社会の行方』新評論.)

———, 1993, *L'Art du moteur*, Paris: Galilée. (= 2002, 土屋進訳『情報エネルギー化社会——現実空間の解体と速度が作り出す空間』新評論.)

———, 1995a, *La vitesse de liberation*, Paris: Galilée. (2001, 暮沢剛巳訳「大陸の漂流」『現代思想』29 (1): 84-95. *原著pp.89-108 の邦訳.)

———, 1995b, 鈴木圭介訳「灰色のエコロジー」磯崎新・浅田彰編『Anywhere』NTT 出版, 218-20.

*Virilio (1995a) の第 2 部第 2 章 “L'écologie

grise” にあたる.

———, 1996, *Cybermonde, la politique du pire: entretien avec Philippe Petit*, Paris: Textuel. (= 1998, 本間邦雄訳『【明日への対話】 電脳世界——最悪のシナリオへの対応』産業図書.)

———, 1998, *La bombe informatique*, Paris: Galilée. (= 1999, 丸岡高弘訳『情報化爆弾』産業図書.)

———, 1999, *Stratégie de la deception*, Paris: Galilée. (= 2000, 河村一郎訳『幻滅への戦略——グローバル情報支配と警察化する戦争』青土社.)

———, 2004, *Ville panique: ailleurs commence ici*, Paris: Galilée. (= 2007, 竹内孝宏訳『パニック都市——メトロポリティクスとテロリズム』平凡社.)

和田伸一郎, 2004, 『存在論的メディア論——ハイデガーとヴィリリオ』新曜社.